



私の平和宣言書

高嶺中学校3年

濱元 優愛さん



原子爆弾により白血病に侵されながらも世界に平和を訴え続けた永井隆博士の精神を受け継ぎ、「愛」と「平和」をテーマとして、島根県雲南市が主催する「第32回永井隆平和賞」。全国1035点の応募の中から、中学生の部で高嶺中学校3年生の濱元優愛さんが書いた「私の平和宣言書」が優秀賞に選ばれました。濱元さんはこの作文について「読んだ人に、戦争の恐ろしさを知ってもらいたいという気持ちで書きました」と思いを話してくれました。皆さんも濱元さんの作文から、平和について考えてみませんか。

島根県雲南市主催
平和作文コンクール

永井隆平和賞



テレビの画面に、目を疑うような光景。ロシアの複数の軍用車両が、ウクライナのキエフ市内を攻撃していた。建物は破壊され、街中を逃げ迷う住民。人々は負傷し、バラバラになった家族。我が子を探す母親の姿は、痛ましい。私はとつさに「戦争だ。惨すぎる。」その映像は以前、祖母から聞いたまるで沖縄戦のようだった。七十七年前の沖縄戦が二気に、蘇えった。この地球のどこかで、まだ戦争が起きている。私は強い衝撃を受けた。なぜ、人々は戦争という過ちを繰り返すのであろうか。

今から七十七年前、ここ沖縄はアメリカ軍が上陸し、沖縄県民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられ戦場と化した。二十万人もの多くの命が奪われた。私の祖父も沖縄戦の体験者である。私の祖父は、沖縄戦終焉の地、糸満市の摩文仁で生まれ育った。沖縄戦当時、祖母が六歳、祖父が八歳。戦争が始まると、祖母は沖縄本島北部の山原と呼ばれる所へ、家族と避難した。逃げるために歩き続けた。弱音を吐くこともできず、泣きながら歩き続けた六歳の祖母。両足はむくみ、パンパンに膨れ上がった。ただただ生き延びること

だけを考えて。アメリカ軍の攻撃から身を避けて、暗い山原の森を逃げ命を守り続けた祖母。戦争が長引き悪化し、激戦地となった摩文仁は、この世とは思えないほどの戦地。焼け野原。全てが焼失。暗黒。住民を含め、大勢の人が銃で撃たれ、死人があちこちに横たわっていた。人が人でなくなる。それが戦争。祖母は当時のことを目を閉じて、ゆつくりとそう話してくれた。今は亡き祖父。私は祖父から戦争の話を聞いたことが一度もない。そこには祖父の壮絶な思いがあった。当時九歳だった祖父。姉と川へ水汲みに行き、目の前で姉の頭に爆弾が投下された。祖父は川へ飛び込み無事だったが、姉の死を目のあたりにした祖父の気持ちは想像を絶する。祖父の思いは、ずっと閉ざされたままだった。そのことを私は、祖母から聞いた。祖母は八十三歳になるが、戦争の記憶をはっきりと覚えている。「戦争は絶対にしてはいけない。命こそ宝、命どう宝。」と強く言う。

六月二十三日、慰霊の日、私は祈りを捧げる。祖母の家の仏壇の位牌には、戦争で亡くなった人の名前が刻まれている。私の先祖。毎年、慰霊の日や旧盆には、私は祖母の家に行き、仏壇に両手を合わせて祈る。平和であることを祈る。

沖縄戦を体験した人々は高齢化して

いる今日、私は平和の尊さを戦争の悲惨さを正しく伝える担い手になりたいと強く思うようになった。私は、糸満市の平和ガイドとして活動している。沖縄戦を体験した祖父母の話を正しく伝えたい。戦争の悲惨さ、平和の尊さ、生命の大切さ、命どう宝を広く大勢の人々に伝えたい。声を大にして伝えていく使命が私にはあるのだ。

沖縄には、まだ戦争の爪痕が残っている。ここ糸満市は沖縄の激戦地で、多くの御霊が眠っている。そのため、現在も遺骨採取が行われている。そのような中、沖縄本島北部の名護市辺野古の埋め立て地に、糸満を含め南部の土砂を使用することが話題になっている。遺族の心情を察すると私は、憤りを感じずにはられない。

梅雨が明け、強い太陽の日差しと青空が広がる沖縄。糸満市摩文仁近くの喜屋武では、青空の中、大輪のひまわりの花畑が広がっている。奇しくもひまわりの花は、ウクライナの国花だという。ここ糸満から平和を願い、平和を発信する。ウクライナに一日も早く平和が訪れますように。平和の尊さ、命こそ宝、命どう宝。あの太平洋戦争は何だったのか、沖縄戦はどんな意義があったのか、戦争という同じ過ちを二度と繰り返さないために、私は今、ここに平和を宣誓する。



うえはら たみこ 上原 民子さん 糸満ふるさと大使

10月30日から11月3日まで開催された、第7回世界のウチナーンチュ大会のため来沖した糸満ふるさと大使の上原民子さん(アメリカ在住)が糸満市役所を訪れ、當銘市長と意見交換しました。上原さんは、糸満市がアメリカ合衆国カリフォルニア州レドンドビーチ市との友好都市締結(2013年)に尽力した一人です。「今後も両市の交友関係を続けるために、お互いが行ったり来たりして交流していきたい。市長にもレドンドビーチの素晴らしい風景を見に来てほしい」と話しました。



「いちやりばちョーデー！」
ヨーロッパから見ると、日本は昔から閉鎖的な国のイメージがいまだに定着していますが、しばらく住んだら、「日系人」の大きな存在に気が付きます。日系人とは、明治時代から戦前・戦後にかけて、北中南米を中心に日本全国から世界各地に移民した日本人の方々を指します。現在6世代目まで400万人以上居ると考えられていて、その半分は中南米に集中しています。またその中、沖縄にルーツを持っている「県系人」は42万人存在すると言われています。
恥ずかしながら、今までそれについて深く考えたことが無かったのですが、先月沖縄で「第7回世界のウチナーンチュ大会」が開催されたことが、意識を改める一つのきっかけになりました。
簡単に説明すると、5年に1回、世界の各国で活躍している県系人が沖縄に帰って、自分のルーツとアイデンティティと触れ合い、その財産を次世代に伝承する目的のイベントです。前回の大会の数字では海外から7千人以上の県系人が5日間にわたって、ウチナーの文化・料理・伝統芸・空手・民謡などをテーマにする行事に参加しています。私は東京滞在が長いですが、日系人をふるさとに歓迎する同規模のイベントは見たこと

が無くて、沖縄人と県系人の熱心に驚きました！
その際、実は糸満市も「世界のイチマンチュ」を歓迎するイベントを主催していました。光栄なことに、私が町の二部をガイドする大事な役割を託されて、ハワイをはじめとする、主に北米から訪れた2世から4世までの世界のイチマンチュとじっくり話す機会になりました。やっぱり、沖縄のアイデンティティを最も大事にしても、「ふるさと」と言えば、県よりも市、村、集落が原点ですね。「糸満はどういう場所?」、「海人って何?」、「どういう暮らしをしている?」、「何を栽培している?」などの質問がずっと飛び交っていて、彼らにとつて、糸満のルーツが大事な宝物だとよく伝わりました。その日のキーワードは英語でも日本語でもなく、他言語では上手く訳せない、ウチナーグチの「チムグクル」、「ユイマル」や「イチヤリバチョーデー」でした。
新天地でも、沖縄の固有文化を世代にわたつてしっかり伝承されていることが分かりました。
1年半前糸満に移住してきた私が、その日イチヤリバチョーデーの意味を遠い国から帰ってきたイチマンチュに改めて教わって、世界中に糸満の兄弟が急に増えた実感しました。



沖縄県糸満市 Itoman City

■人口

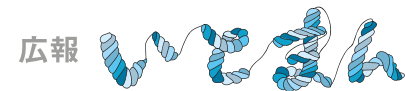
	10月	前月比
人口	62,555	-35
男	31,704	-22
女	30,851	-13
世帯数	28,014	-24

■火災・救急

	10月	前年比
火災	0件 (8件)	-2 (-12件)
救急	288件 (3128件)	51 (720件)

※()内は令和4年の累計

- 面積 46.60Km² (2021年10月1日現在)
 - 市の花木 ブーゲンビレア ■市の木 ガジュマル
 - 市の花 日野草 ■市の魚 タマン
- (人口、世帯数、火災・救急件数は2022年10月末現在)



「声の広報」届けます

目の不自由な人に糸満市の情報を届けるため、広報いとまんをCDに吹き込み配布しています。「声の広報」を希望する人は、秘書防災課(☎840-8118)まで問い合わせてください。

ラジオ広報・市役所便り (FMたまん)

- 月～金
- ① 7時45分～7時50分
- ② 12時55分～13時
- ③ 17時55分～18時
- 土～日
- ④ 12時55分～13時